

北琉球祖語の祖形再建のこころみ

松 森 晶 子

1. はじめに

筆者はこれまで松森（2000、2012）などを通じ、琉球祖語に存在していたことが想定される語彙（系列別語彙）のリストを完成させたいと、それを使用して琉球各地でその語彙の音形とアクセントを収集・記録し、将来に向けて残しておくべきことを主張してきた。琉球祖語に存在していたと想定される語の祖形の比較再建には、広範な地域から集められたデータに基づく考察が不可欠だからである。しかし現時点では、それは十分なレベルにまで達しているとは言えない。

本稿は北琉球祖語の語彙の祖形再建の試みだが、本来ならば祖形再建は、より多くの琉球地域の、より網羅的なデータに基づいて行うべきであることは承知している。しかし、それらのデータが万全に整うのを待っていたのでは、琉球語の祖形再建はいつまで待っても開始できないように思われた。そこで本稿では、過去に成された北琉球諸語・諸方言の辞書の記述や調査の成果を利用して、北琉球祖語に存在していたと思われるいくつかの語の祖形再建のこころみを、（時期尚早とは思われるものの）開始することとした。

本稿は、首里方言の記述である国立国語研究所（編）（1998）を中心に据え、それに那覇方言の内間・野原（編著）（2006）、今帰仁方言の仲宗根（1983）、伊是名島方言の伊是名島方言辞典編集委員会（編）（2004）、与論島方言の菊・高橋（2005）、沖永良部島和泊町皆川方言の上野（2005a, b, 2006a, b, c）、徳之島浅間方言の上野（2017a, b）、奄美大島大和浜方言の長田・須山（編）（1977）と長田・須山・藤井（編）（1980）、および与論島・沖永良部島・久米島を同じ基礎語彙のリストを使って調査した木部（編）（2016、2017）の一連の記述報告を付け加え、それらの体系の同源語を比較・検討しながら、北琉球祖語の一部の語の祖形を再建し、提案する。

一方、（断片的ではあるが）琉球祖語の祖形は、すでに提示され始めている。これらは数篇の論文（たとえば Pellard 2015、ペラール 2016、ローレンス 2019）や、いくつかの研究発表の配布資料などにも散見される。またこれまでに五十嵐（2019）、ローレンス（2020）が電子的な形で公開している同源語の網羅的な語彙のリストなどにも、すでに日琉祖語、あるいは琉球祖語の祖形案が提示されている。

私見ではそもそも語の祖形案は、その再建の「具体的な根拠」とともに提示される必要がある。すなわち、①どの地点のデータをもとに祖形再建を行ったか、②それぞれの体系において、どのような音変化が、どのような順番でその祖形に生じて現実の形へと変化したのか、③それぞれの音変化の例外に見える現象は、どのように説明されるのか、④当該の語が借用語ではないと想定

される根拠は何か、といった点についての検討と詳細な議論とともに、祖形案が提示されなければならない。しかしこれまでに先行研究によって提示されてきた多くの祖形案は、そのような具体的根拠、およびそれにかかわる議論とともに提示されてきたものとは言えない。

さらに先行研究の祖形案には、互いに食い違いが見られることがある。仮に、ある語に対していくつかの異なる祖形案が提示されている場合、そのうちのどれがより妥当なものであるか—どれもが妥当ではない可能性も、もちろんあるが—について、現時点で議論しておくことが肝要である。つまり、こうした食い違いをそのまま放置せず、研究者どうしの意見交換によって議論を深め、各語の祖形についてある程度の合意に達しておくことが求められているのである。しかしながら、このようなことを目標にした本格的な議論も、未だ開始されているとはいえない。

このような状況のなかで、我々が今後どうしても避けなければならないことは、別々の個人が提案した祖形案のどれもが妥当なものとして共存し合い、各研究者がその中から自説にもっとも都合のよいものを採用する、という状態に陥ることである—このようなことを考えるのは、そもそも杞憂かもしれないが—。これを回避するためには、誰かが口火を切って、これまで提示されてきた祖形案をひとつひとつ検討していく努力を開始しなければならない。本稿は、それを目指した筆者の初めてのこころみである。

なお本来ならば、五十嵐 (2019)、ローレンス (2020) が電子的な形で提示している最新の祖形案については、それらを引用し、批判的な検討を加えながら分析を行うべきなのだが、本稿ではそれをあえて行わないことにした。なぜなら (紙媒体で公開されたものと異なり) これらの祖形は、他の研究者が参照することが困難な場合があるからである¹⁾。さらにこれらの電子的に公開されている祖形案は、今後なんども更新が繰り返される可能性があり、そうすると過去に提示された祖形案を、我々が確認したり、引用したりすることが難しくなってしまうことも想定されるからである。

以上のような事情から、少なくとも本稿では、これらの電子的な手立てによって提示されている最新の祖形案には触れず (参照・引用せず) に、議論を進めていく方針を採ることとした。この点については異論のある研究者もあるだろう。しかし本稿はけっして、これら先行研究による祖形案を軽視しているわけではない。いずれ、上述のようなその再建の根拠と厳密な議論とともにこれらの祖形案が提示された際には、それを取り上げ、その祖形を導く手続きの妥当性についても検討しながら、分析を行いたいと考えている。

2. なぜ今、「北」琉球に焦点を当てるのか

「上代特殊仮名遣い」の乙類母音の合流の仕方が日琉語で異なることから見て、琉球語が日琉祖語から分岐したのは、本土に最古の文献が出現する奈良時代より前である (服部 1978b、松森 1992 : 17-25、Matsumori 1995: 23-25、Pellard 2015: 8、ペラール 2013、2016) ことは、疑う余地がない。しかし琉球祖語は、日琉祖語から分岐を遂げた後においても、数世紀にわたって日本語と接触し、そのために漢語をはじめとする多くの語彙が日本語から琉球語に取り入れられてきた (Pellard 2015: 9、ペラール 2016 : 115) とされている。このように琉球語は、日琉祖語から分岐・成立した後も、たえず本土方言からの影響をさまざまに受けながら今日に至っているのだが、と

りわけ九州方言との共通性が大きいことが指摘されている（かりまた 2012、Karimata 2015: 114、狩俣 2020）。

狩俣（2020）は、その影響の大きさから考えて琉球語の故地が九州にある、という伊波普猷の考えを支持・発展させ、「九州琉球祖語」という祖体系の存在を仮定している。本稿では、慎重を期すために、「九州琉球祖語」という用語を（今のところ）使用せず、琉球諸語の祖体系が日琉祖語から最初に分岐した段階の言語体系のことを、従来通り「琉球祖語」と呼んで、以下、議論を進めることとする。

五十嵐（2019）は、日本語と琉球語との間で「同源」と考えられる語彙についての網羅的なリストを作成・公開しているが、以上述べたような事情から、その同源語のリストにある語彙の中にも、①「琉球祖語」の段階においてすでにその体系内に存在していた琉球在来の語、と並んで、②「琉球祖語」にまではさかのぼらず、それより後の時代になって本土から琉球に流入した語が、相当数含まれている可能性がある。

このような状況のなかで重要となってくるのは、以上のような借用語—すなわち琉球祖語にはさかのぼれず、後の時代になって本土方言から琉球に入ってきた語—をどのように判別していくか、ということである。この点に関連して、服部（1978a: 95）には次のような記述がある。

- （1）今後の琉球方言と本土方言との比較研究においては、本土方言からの借用語を如何にして見出すかが大きな課題とならなければならない。その目的のためには、本土方言との比較研究は言うまでもないが、琉球方言内においては、その主な諸方言のできるだけ詳しい—正確な音形と「意義素」の記述を含む—共時論的、記述的研究と、内的再構と、比較言語学的観点からする詳しい言語地理学的研究—（中略）—が緊要である。

本稿では、（1）の後半部分にある指摘—すなわち、（本土方言との比較ではなく）琉球語内部のいくつかの体系の記述データをもとにした内的再建と比較言語学的観点からの考察—に的を絞る。とりわけ内的再建の方法を用いて、琉球祖語から現代の琉球諸方言の体系に至るまでに生じた様々な音変化のうちの、比較的初期に生じた（歴史的に古い）音変化を見極めたくて、ある語がその古い変化の影響を経ているかどうかを検討し、それによって当該の語が、祖語の段階から存在した語（在来語）であるか、それとも後から流入した語（借用語）であるかを判断するころみを行う。

ところで、このような本土との接触による影響は、南琉球より北琉球のほうに多いことが、従来から指摘されている。つまり、奄美諸島や沖縄本島の諸方言に見られる語彙の中には、北琉球祖語（ひいては琉球祖語）にさかのぼれる語ばかりではなく、歴史上もっと後になってから、本土の諸体系から取り入れられた借用語が、数多く存在する可能性が高い。本稿がまず北琉球に焦点を当てて上述のような内的再建と比較言語学的考察を行おうとするのは、このような事情によるものである。

さて、北琉球の音韻史のなかでも、その現代の音韻体系に際立った特徴を作り上げた変化の代表として、よく「狭母音化」が挙げられることが多い。これは妥当な一面を持つものの、私見では、この狭母音化と呼ばれる変化は、北琉球の音韻史の中でも比較的あたらしい変化の一つであ

り、したがって上述のような借用語であるか否かの見極めには、あまり役立たないように思われる。これに対し、この狭母音化よりも歴史的に見て早く生じたと思われる、北琉球の音韻史の中でも比較的「古い」変化に焦点を当てることが、まず当該の目的のためには役立つ。

たとえば国立国語研究所（編）（1998：156）、内間・野原（編著）（2006：167）には、「*teimuri* 煙」という見出し項目がある（両者とも「文語」と記述している）。この語を取り上げて服部（1979：57-58）は、（もしこの語が本土のものと同源語で、その祖形が **kemuri* だとすると）現代首里方言で ×*kimui*（以下、本稿を通じて×という記号は、実際の出現形とは異なる、ということを示す場合にその左上に付すこととする。）であれば音韻法則に合うが、そうではないからこれは本土からの借用語に違いない、としている。この服部（1979：57-58）が、仮に **kemuri* という祖形を立てて想定した **kemuri* > ×*kimui* という変化には、語末音節に起こった「歯茎流音 **r* の脱落変化」がかかわっている。この変化は北琉球語の音韻史のなかでも比較的古い変化と想定されるので、この変化の影響を受けていないことが、ある語が借用語であることの一つの指標となり得るということを、服部（1979）は示唆しているのである。

そこで本稿では、この「歯茎流音 **r* の脱落」という音変化に焦点を当てて、その変化にかかわるいくつかの語の祖形再建を試みると同時に、この変化の影響を経ているかどうかを検討することによって、北琉球の祖語にさかのぼることのできない語（すなわち、後から流入した借用語）を、北琉球祖語の段階から体系内に存在する語（在来語）から、区別して取り出すところみを行う。もしある語が、琉球語が日琉祖語から分岐した時点（「琉球祖語」の段階）からその体系に存在していたとするならば、北琉球においてはこの古い変化の影響を受けているはずである。これに対し、後から取り入れられた借用語には、その変化の影響が及んでいないことが想定される。それは各語の祖形再建を試みるプロセスにおいて、おのずと明らかになるだろう。

さらに本稿では、首里方言には **r* の脱落変化の結果として /ii/ という音連鎖で終わることになった語の例がなぜ存在しないのか、という疑問を出発点にして、沖縄語（沖縄本島とその周辺の島々の諸方言）には、過去において、ある特定の音連鎖を回避するような音韻上の「制約」が存在していたことを論じる。

まず次節から第4節にかけてでは、「歯茎流音 **r* の脱落」と「狭母音化」の相対年代を検討したうえで、前者のほうが後者より古い変化であることを確認する。また、「歯茎流音 **r* の脱落」という変化の影響が、現代の北琉球の広範囲の体系に及んでいることも確認する。次いで第5節では、その考察をもとに北琉球祖語のいくつかの語彙の祖形再建を試み、続く第6節では在来語から借用語を区別するところみを行う。つづいて第7、8節では、この **r* の脱落変化は、首里方言では *çizai*（左）には生じているのに、なぜ *nizini*（右）には生じていないのか、という問題提起を行うことで、沖縄本島とその周辺の言語体系の音韻特徴を浮き彫りにし、あわせてこの地域の現代の音形から祖形を再建する際の「限界」をも指摘する。最後に第9節では、その限界を打開するために、与論島・沖永良部島の記述調査の進展が、今後果たす役割について論じる。

3. 北琉球に起こった音変化とその相対年代—久米島方言に焦点を当てて

北琉球の音韻史上、「狭母音化」は比較的あたらしい変化の一つであると言えよう。ごく単純化していえば「狭母音化」は、半狭母音の *o, *e がそれぞれ狭母音の u, i に変わった、という「無条件」変化である。後舌母音の *o は、琉球を通じて *o > u の変化を経て u になったが、前舌母音の *e に関しては、北琉球と南琉球では異なる経緯を経た。今回焦点を当てる北琉球の多くの地点では、*e は *e > i (あるいは *e > ī) のような経緯を経て、現代の i (ī) へと変化した²⁾。

まず、この「狭母音化」が比較的あたらしい変化であることを、木部(編)(2017)の久米島方言のデータを使って確認しよう。沖縄本島周辺の多くの体系では、狭母音化の進行によって *e > i、*o > u の変化が完了している。このような体系では、特定の語に i あるいは u という狭母音が出現している場合、その祖形に狭母音 (*i と *u) を建てるべきか、半狭母音 (*e と *o) を建てるべきか、その体系内部の情報からは判断がつかないことがある。久米島方言もそのような体系のひとつで、祖体系における *e は *e > i の変化によって *i と合流を遂げ、*o のほうは *o > u のような変化によって *u と合流を遂げてしまっている。そのため、特定の音節がその祖体系において狭母音を持っていたか、半狭母音を持っていたかの判断ができないことが多い。

(2) は木部(編)(2017)の基礎語彙から抜き出した久米島の真謝方言の語彙だが、現代ではすべて /i/ として出現している下線部の音節主音の /i/ が、*e と *i のどちらから生じたのか、この例だけから判断することはできない(以下本稿を通じ、すべての語のアクセント符号は除く)。

(2) 久米島真謝方言の語末が /i/ で終わる語彙 (木部(編)2017から)

mimi (耳) tɛimi (瓜) kumi (米) mumu (稗) nami (波) ?imi (夢) ?ami (雨)
numi (鑿) / hani (羽) φuni (舟) ?uni (鬼) naganu (背中) sani (種)
φu:ni (骨) ja:ni (来年) / ka:gi (蔭) ci:ragi (白髪) ?usagi (兎) ?agi (陸地)

この久米島方言の例が示すように、狭母音化によって *e と *i の区別が完全に消滅してしまった体系においては、特定の音節の祖形が狭母音化以前にどちらの母音を持っていたかを知ることは難しい。しかしそのような場合でも、当該の体系内部の情報を手がかりに、祖体系における音価を導き出せる場合がある。次の久米島方言の例はその典型であろう。ここでは、語末の母音が祖体系において狭母音の *i であったことが、その音環境から判断できる。

(3) 久米島真謝方言の語例 (木部(編)2017から)

hai (針) nai (果物) tai (二人) çikai (光) çizai (左) jurai (涎) kannai (雷)
makai (椀) mitai (三人) subai (尿) tunai (隣) ?akagai (明かり)
juu (篩) mui (丘) tui (鳥) tɛui (一人) ?urui (踊り) kusui (薬) çurui (稲光)
φukui (埃) subui (冬瓜) sunui (モズク) mabui (魂)

これらの語彙は、*nari > nai (果物) のように、語中の歯茎の流音 *r が狭母音 *i の前で消滅してしまっただけの結果、現代のような形に変化したからである。すなわち久米島方言の祖体系では、*r

の脱落という「条件変化」が、次の(4)に示されたような条件のもとに起こったことが分かる。なお、祖語の段階で当該の音が現代諸方言と同様にはじき音 *r であった、と断定することは現時点ではできないので、本稿では「何らかの流音」とだけ指定し、以下その祖形には、*r という記号を使用することにする。

(4) 歯茎流音 *r の脱落 (条件変化)

母音と前舌狭母音 i に挟まれた歯茎流音 *r が脱落する。

後述するが、(4)の条件変化の影響は、この久米島方言だけでなく、沖縄本島とその周辺、さらに与論島、沖永良部島、徳之島、喜界島の一部など、北琉球の広範囲の地域の体系に及んでいることが知られる(名護市史編さん委員会(編)2006:64)。しかしながらこの変化は、奄美大島には及んでいないことも知られている。そのため(3)の各語を、奄美大島の同源語と比較してみると、北琉球諸語の祖体系には、確かに *r が存在していたことが確認できる。

以下は、長田・須山(編)(1977)、および長田・須山・藤井(編)(1980)を参照し、奄美大島の大和浜方言の語彙から、(3)の同源語を挙げた。(以下本稿を通じて、比較言語学的考察を行う際には、当該の語の同源語が辞書の見出し語や記述報告の項目にない場合、あるいは各体系で使用される対応語があきらかに同源語ではない、と判断される場合には、その部分を --- で示す方針とする。また体系間の比較が容易になるよう、辞書や他の記述研究から引用した語例については、それぞれの音声表記を、各辞書・記述報告の音声記号との対照表などを参照しながら、国際音声記号(IPA)によって簡略音声表記に書き直し、統一を図った。)

(5) 奄美大島大和浜方言の語例³⁾

hari(針) nari(蘇鉄の実) t'a:ri(二人) çik'jari(光) çidzari(左) jodari(涎)
k^hannari(雷) --- (椀) mitc^hari(三人) eibari(尿) t^hunari(隣) ha:gari(明かり)
juri(篩) muri(杜) t^huri(鳥) t^cu:ri(一人) ^wuduri(踊り) k'usuri(薬)
k^hannari nu çidzari(稲光) --- (埃) eiburi(冬瓜) çinori(モズク) maburi(靈魂)

したがって、少なくとも北琉球祖語の段階においては、(3)に挙げられた語の祖形の語末母音 /i/ の直前には、何らかの歯茎の流音 *r が存在していたことが想定される。

さて、この(4)の条件変化が北琉球諸地域の祖体系に起こった時点では、狭母音化はいまだに同体系に生じてはおらず、その時点では *i と *e との音韻的対立は保たれていた、と考えなければならない。なぜならば、語末が本来の半狭母音 *e で終わっていた語には、(4)の条件変化は生じていないからである。このことを示すために、木部(編)(2017)のデータから、(3)と同じ久米島真謝方言の「kuri(これ)、?uri(それ)、?ari(あれ)」という語を検討してみよう。これらは、(4)の変化の影響を受けて ×kui、×?ui、×?ai のようにはなっていない。なぜならばこの3つの語は、(4)の条件変化が起こった時点ではその語末に *e を持っていたため、この変化の影響を受けずに終わったからである。

これらの語が北琉球祖語においてその語末に *e を持っていたことの証拠は、北琉球祖語の *e

が *e > i の狭母音化を経て、現在、中舌の /i/ として出現している奄美語の徳之島方言や奄美大島方言のデータから得られる。たとえば上野 (2017a, b) によれば、徳之島浅間方言ではこれらは「kuri:, ?uri:, ?ari:」と出現し、また長田・須山・藤井 (編) (1980) によれば奄美大島の大和浜方言では「k^huri, ?uri, ?ari」と出現する。このことから、北琉球の祖体系においてはこれらの語の語末母音は、*i ではなく、*e (あるいは *i) であったことが確認できる。

さて、前述の *r の脱落変化 (4) と狭母音化との関係を見てみるために、もう一度、久米島方言の語例を検討してみよう。この久米島方言の祖体系に (4) の条件変化が及んだ時、まだ狭母音化はその体系に生じてはいなかった。したがってその段階では、現代の久米島の「kuri (これ)、?uri (それ)、?ari (あれ)」の語末母音は、*i ではなく *e であった。そのためこれらの語は (4) の変化の影響を免れ、その結果これらの語の *r は脱落しなかった。狭母音化はその (4) の変化の後に生じて、これらの語の語末の *e を現代の /i/ に変化させた。したがって、次のような相対年代が導き出せる。

(6) 二種類の変化の相対年代

歯茎流音 *r の脱落変化 (4) > 狭母音化 (*e > i, *o > u)

この相対年代によって語がどのように変化を遂げて現代の語形に至ったかを、現代久米島真謝方言の tunai (隣)、?ari (あれ)、tui (鳥)、kuri (これ) を例にとって、以下に示しておく。

(7) 現代久米島の tunai (隣)、?ari (あれ)、tui (鳥)、kuri (これ) の経てきた変化過程

	*tonari (隣)	*are (あれ)	*tori (鳥)	*kore (これ)
*rの脱落変化 (4)	*tonai	----	*toi	----
狭母音化	*tunai	*ari	*tui	*kuri
現代の語形	tunai	?ari	tui	kuri

以上から、歯茎流音 *r の脱落 (4) という条件変化は、狭母音化という無条件変化より先に (歴史的に前に) 生じたことが推定できる。この条件変化は、奄美大島から他の諸方言が分岐した後に、後者の祖体系に生じた、北琉球の音韻史のなかでも比較的古い変化のひとつであると言えるだろう。そこで本稿では、以下、(4) の *r の脱落という変化に焦点を絞って、借用語を見極めるころみを開始することにする。

4. 北琉球の諸方言における *r の脱落の影響

さて、以上 *r の脱落変化 (4) を久米島に焦点を当てながら見てきたが、この変化の影響は現代の久米島方言だけでなく、北琉球の広範囲にわたって観察されている (名護市史編さん委員会 2006:64)。このことを確認するために、国立国語研究所 (編) (1998)、内間・野原 (編著) (2006)、仲宗根 (1983)、伊是名島方言辞典編集委員会 (編) (2004) を参照しながら、沖縄語の下位区分、

すなわち沖縄本島の首里、那覇、今帰仁、および沖縄本島北部の伊是名島の各体系から（４）の変化を経たと思われるいくつかの語を、以下に選んで検討してみよう。これら沖縄語の諸方言にも、（４）の変化が及んで *r が消滅していることが、次の例から分かる。

（８） 沖縄語の諸体系における *r の脱落変化の影響を受けた語例

首里：nai (果物) tai (二人) ϕ it \dot{c} ai (光) ϕ id \dot{c} ai (左) judai (涎) tui (鳥)
 \dot{c} ui (一人) wudui~?udui (踊り) kusui (薬) cibui (冬瓜) mabui (魂・靈魂)
 那覇：nai (実) tai (二人) \dot{c} it \dot{c} ai (光) \dot{c} id \dot{c} ai (左) jurai (涎) tui (鳥) \dot{c} ui (一人)
 ?urui (踊り) kusui (薬) cibui (冬瓜) mabui (生きている人間の魂)
 今帰仁：nai (果物) t'ai (二人) p^hit \dot{c} ai (光) p^hid \dot{c} ai (左) judai (涎) t^hui (鳥)
 \dot{c} 'ui (一人) wu:dui (踊り) k^husui (薬) cibui (冬瓜) mabui (幽霊・靈魂)
 伊是名島：nai (実) t'ai (二人) ϕ it \dot{c} ai (光) ϕ izai (左) judai (涎) tui (鳥)
 \dot{c} 'ui (一人) wudui (踊り) kusui (薬) cu:ui (冬瓜) maui (生霊・靈魂)

また、（４）の変化の影響は、奄美諸島の与論島、沖永良部島、徳之島の各方言にも観察できる。それを示す例として、木部（編）（2016）の与論島と沖永良部島の基礎語彙のデータ（与論島は古里・那間・叶方言の例、沖永良部島は田皆方言の例である）、および上野（2017a, b）の徳之島浅間方言の記述データから、（８）の同源語を以下に提示する。

（９） 奄美語の諸体系における歯茎流音 *r の脱落変化の影響を受けた語例⁴⁾

与論島：nai (果物) tai (二人) -- (光) pi \dot{c} ai (左) ju:dai (涎) tui (鳥)
 \dot{c} ui (一人) wudui ~βudui (踊り) kusui (薬) cibui (冬瓜) ma:bui (魂)
 沖永良部島：naimun (実) ϕ utai (二人) \dot{c} ikjai (光) \dot{c} id \dot{c} ai (左) judai (涎) -- (鳥)
 \dot{c} ui (一人) wudui (踊り) kusui (薬) cu:bui (冬瓜) -- (魂)
 徳之島：nai (果物) t'ai (二人) s^hikjai (光) s^hid \dot{c} ai (左) judai (涎) t^hui (鳥)
 \dot{c} 'ui (一人) wudui (踊り) k^hu \dot{c} ui (薬) s^hbui (冬瓜) mabui (幽霊・魂)

他にも与論島方言の記述である菊・高橋（2005）、沖永良部島皆川方言の上野（2005a, b, 2006a, b, c）、喜界島方言の上野（2014）などを参照して検討すると、（４）に示された条件変化の影響は、久米島、沖縄本島、伊是名島、与論島、沖永良部島、徳之島、喜界島など、北琉球のかなり広い地域にわたって観察されることが確認できる。これら北琉球の諸方言では、その祖体系において、ある語の祖形が語末に *i を持っていたか、*e を持っていたか、を推定するにあたって、（４）の *r の脱落変化の影響が当該の語に及んでいるか否かを、ひとつの指標とすることができる。

5. 北琉球祖語の祖形再建のころみ—首里方言を出発点にして

さて、本稿ではこの歯茎流音 *r の脱落変化（４）を手がかりにしながら、いくつかの語の祖

形を推定する。以下、(4)の条件変化が生じて *r が脱落したと考えられる語例を、国立国語研究所(編)(1998)を参照して、沖縄語の首里方言から挙げる⁵⁾。そのほとんどが、/ai/あるいは/ui/の音連鎖を語末に持ち、/ii/の音連鎖のものは、jaci: (やすり)、wiki: (女から見た男兄弟)など、わずかの語例しか発見できなかった(この /ii/ の音連鎖で終わる語については、第7節であらためて取り挙げて、考察することとする)。(10a)はその語末が /ai/、(10b)はその語末が /ui/ の音連鎖で終わる語例である。

(10) 歯茎流音 *r の脱落変化(4)を経たと想定される首里方言の語例

- a. ?amai (余り) ?atai (屋敷内の畑・菜園) hai (針) hakai (秤) hanadai (鼻水)
 ɸitai (光) ɸidai (左) ?ijai (伝言・ことづて) judai (涎) kadzai (飾り)
 magai (彎曲(したもの)) makai (飯あるいは汁を盛る椀) nai (実・果実)
 sawai (病気・体の異常) sugai (装い・服装・身なり) ci:bai (小便) tabai (束・たばね)
 tumai (船着き場・港) tunai (隣) watai (渡り・渡し場) wunai (男の兄弟から見た姉妹)
- b. hugui (ふぐり・陰囊) ja:dui (都落ちした士族の部落) jui (篩) kumui (池・沼)
 kusui (葉) ku:i (裏部屋) mui (丘・山) nui (糊) nukui (残り) sinui (もずく)
 tajui (便り・消息・頼り) tui (鳥) tidui (千鳥) tui (一人) ?ui (瓜) wudui (踊り)
- (国立国語研究所(編)1998から)

これらはすべて(4)の変化を経て現在の形になったと考えられるため、その祖形の語末には *ri という音節が再建できる。したがって、(10)に挙げられた語彙の祖形には、(11)に示したようなものが建てられる⁶⁾。(以下、本稿を通じて、1つの語形に2つの祖形の可能性がある場合は / で示し、その前後にその2つの祖形案を示すこととする。)

(11) 再建された北琉球祖語の祖形案⁷⁾

- a. *amari (余り) *atari (屋敷内の畑) *pari (針) *pakari (秤) *panadari (鼻水)
 *pikari (光) *pidari (左) *ijari (伝言) *jodari /*judari (涎) *kazari (飾り)
 *magari (彎曲) *makari (椀) *nari (実) *sawari (病気) *sogari (装い)
 *sibari (小便) *tabari (束) *tomari (船着き場・港) *tonari (隣) *watari (渡り)
 *wonari /*wunari (男から見た姉妹)
- b. *pugori /*puguri (ふぐり) *jadori (都落ちした士族の部落) *jori /*juri (篩)
 *komori /*komuri (池) *kusori /*kosori (葉) *kori (裏部屋) *mori /*muri (丘)
 *nori /*nuri (糊) *nokori /*nukori (残り) *sunori /*sunuri (もずく)
 *tajori /*tajuri (便り) *tori (鳥) *tidori (千鳥) *pitori (一人) *ori /*uri (瓜)
 *wodori (踊り)

6. 琉球語音韻史上の課題—借用語をどう判別したらよいのか

一方、(4)の変化の影響をこうむっていない場合には、原則的に—ここで「原則的に」と言っ

た理由については後述する。—その祖形には、*re という音節で終わる形が再建できる。そこで、国立国語研究所（編）（1998）を参照しながら、首里方言において /ri/ という音節で終わる語例を収集した。その結果、(12) に挙げられるような語が見つかった。次の (12a) は語末が /ari/、(12b) は語末が /uri/ の音連鎖で終わる例である。（以下の下線の引かれた語については、後述する。）

- (12) 現代の首里方言で /ari/, /uri/ の音連鎖で終わる語例（国立国語研究所（編）1998から）
- a. ?agari (東) ?awari (あわれ・辛いこと・苦勞) hanari (離れ島・離島)
 ?ibari (干割れ・亀裂・ひび・あかぎれ) ?iwari (いわれ・由来) jari (破れ・破れたところ)
 katawari (片割れ・割れた一片) midari (乱れ) nagari (流れ) namari (鉛)
 nari (慣れ・習慣) tanari (ていさい・ありさま・身のこなし・風采)
 wakari (別れ・分かれたもの) wari (割れたもの)
- b. guri (沈殿物・かす・おり) kuri (烏賊の墨) ku:ri (氷砂糖) miduri (芽)
 natiguri (夏のわか雨) naguri (なごり・心残り・あらしなどの余波) turi (風)
 ?usuri (敬うこと・尊ぶ気持ち・大切に思う念)

これらの語は、(4) の歯茎流音 *r の脱落変化を経ていない。ということは、これらの語の語末音節は、(4) の条件変化が起こった時点では、依然として半狭母音 *e を音節主音として持つ *re だった可能性がある。つまり、これらの祖形の語末には、*ari、*uri (あるいは *ori) ではなく、*are、*ure (あるいは *ore) のような音連鎖を再建することが可能である。

まず、(12a) の語彙の中から ?agari (東) という語に着目しよう。この語は北琉球のすべての地域で(4)の*rの脱落変化の影響をこうむっておらず、その語末音節は ri で出現している。(また徳之島では ri、奄美大島では re で出現している。) 次の例は、それを示す。

- (13) 久米島 ?agari 那覇 ?agari 首里 ?agari 今帰仁 ?aga:ri
 伊是名島 ?agari 与論島古里・那間・叶 ?agari: 沖永良部島田皆 ?agari
 徳之島浅間 ?aga:ri 奄美大島大和浜 ?agare

以上の事実から、北琉球祖語の「東」には、(*agariではなく⁸⁾ *agareが再建できる⁹⁾。

これに対して、(12b) で下線の引かれた miduri (芽) という語について考えてみよう。この語に関して、仲宗根 (1983: 543) の今帰仁方言の記述には、次のような指摘がある¹⁰⁾。

- (14) 仲宗根 (1983: 543) の記述

ミドゥリー midu 「rii 草木の新芽。緑色の意味はない。参 全国方言辞典「みどり
 ②松の新芽。神奈川県津久井郡」、宮崎県方言辞典「みどり 木々の新芽の総称」

もし首里方言の miduri (芽) (あるいは今帰仁方言の midurii)¹¹⁾が、本土諸方言の *midori (木々の新芽) と同源語で、後者の形が北琉球祖語 (あるいはそれ以前の琉球祖語) の祖形だったとす

るならば、たとえば現代の首里方言では、×*Ndui* のような語形で出現しているはずである¹²⁾。しかし、現実にはそうなってはいない。ということは、この語は北琉球祖語の体系において存在していた在来語ではない可能性がある。一方、仮にこの語が琉球祖語、あるいは北琉球祖語の段階から存在していた語だとすると、**medore* のような祖形を建てないと、現代首里方言の *miduri* (あるいは今帰仁方言の *midurii*) という語形にはならないはずである。

さきに (4) の条件変化の影響をこうむっていない場合には、「原則的に」その祖形の語末音節には **re* を再建する、と述べた。ここで「原則的に」とした理由は、実はこれらの中には借用語が含まれている可能性がある、と見たからである。特に (4) の変化が終了してしまった後に、他の体系から *ri* を語末に持った形で取り入れられた語には、当然のことながら、**r* の脱落変化 (4) の影響は、及んでいないことが想定される。そのため現在それらは、その語末に /*ri*/ を持った形で出現している可能性が高い。

以上から、この *miduri* (芽) という語は、(4) の条件変化が終了してしまった後 (しかしながら狭母音化が起こる前) に、(おそらくは *midori* の形で) 本土方言から琉球語に取り入れられた借用語のひとつ、と本稿では提案しておく。(しかしながら、この語の日琉祖語の祖形として、たとえば **medore* のようなものを再建し、本土の日本語において **medore* > **midori* のような変化を想定しなければならない可能性もある。)

さて、(12) に挙げられた語の中には、(4) の条件変化の終了した後に他の体系から取り入れられ、そのため現在、語末に /*ri*/ を持つ語形で出現しているものも、含まれている可能性がある。現時点で断定はできないが、私見では、(12) において下線の引かれた語 — *miduri* (芽) 以外にも、*namari* (鉛)、*ku:ri* (氷砂糖)、*naguri* (なごり・余波)¹³⁾ がある — には、その可能性が考えられる。これらは (4) の変化の終了した後 (しかし狭母音化が生じるより前) に、それぞれ *namari*、*ko:ri*、*nagori* の形で他の体系から借用された¹⁴⁾ 可能性がある。この点を考慮し、少なくとも本稿では、北琉球祖語 (あるいは琉球祖語) の祖形として **namare* や **ko:re*、あるいは **nagure* (あるいは **nagore*) を再建する、ということを行わない。

本稿では、以上の4つの語以外の語彙について、(12) に挙げられた語の祖形として以下のようなものを提案する。(なお、借用語の可能性のある上述の4つの語の祖形はここには出さず、-- で示した。)

(15) 再建された北琉球祖語の祖形案

- a. **agare* (東) **aware* (あわれ・苦労) **panare* (離れ島) **pibare* (干割れ)
 **iware* (いわれ) **jare* (破れ) **kataware* (片割れ) **midare* (乱れ)¹⁵⁾
 **nagare* (流れ) -- (鉛) **nare* (慣れ) **tanare* (ていさい・身のこなし) **wakare* (別れ)
 **ware* (割れたもの)
- b. **gore* /**gure* (沈殿物) **kure* (烏賊の墨)¹⁶⁾ -- (氷砂糖) -- (芽)
 natugore* /natugure* (夏のにわか雨)¹⁷⁾ -- (なごり・余波) **tore* (風)¹⁸⁾
 osore* /usore* (敬うこと)¹⁹⁾

7. 歯茎流音 *r の脱落変化の影響によって生じた /ii/ という音連鎖について

さて、ここで (10) に挙げられた語例にもどり、これらの語はなぜ「 ϕ idzai (左)、nai (果物)、ju (籬)、wudui (踊り) …」のように、そのほとんどが /ai/ あるいは /ui/ の音連鎖を語末に持ち、なぜ /ii/ の音連鎖のものはわずかしかが存在しないのか、という点について考えてみよう。

首里をはじめとする沖縄本島中南部の諸方言は、短母音が /a/、/u/、/i/ の3つの母音から成る体系を持っている。それならば、(4) の *r の脱落変化の影響によって、(少なくとも /ai/ や /ui/ という母音連鎖と同程度に) /ii/ という母音連鎖が生じていても不思議ではない。それにもかかわらず、そのような現象は見られないのである。

今、国立国語研究所 (編) (1998)、内間・野原 (編著) (2006)、仲宗根 (1983)、伊是名島方言辞典編集委員会 (編) (2004) を参照して、沖縄語の諸方言において、*r の脱落変化によって /ii/ という音連鎖で終わったと考えられる語を収集してみた。その結果、以下のようなものが得られた (なお、首里と伊是名島の「祭り」は、/ii/ という音連鎖で終わっていないので、ここではカッコに入れてある)。

(16) 沖縄語諸方言で /ii/ という音連鎖で終わる語例

首里: jaci: (やすり) tsi: (釣瓶) (matzi: (祭り)) wiki: (女から見た男兄弟) ϕ udi: (稲光)
那覇: jaci: (やすり) tzi: (釣瓶) -- (祭り) jiki: (女から見た男兄弟) ϕ uri: (稲光)
今帰仁: jaci: (やすり) tzi: (釣瓶) matzi: (祭り) jiki: (女から見た男兄弟) p^hudi: (稲光)
伊是名島: jaci: (やすり) tzi: (釣瓶・釣り針) (matzi: (祭り))
-- (女から見た男兄弟) hudi: (稲光)

結論から言えばこれらの /ii/ という音連鎖は、*iri から生じたものではない可能性が高い。上野 (2017a, b)、長田・須山 (編) (1977)、長田・須山・藤井 (編) (1980) を参照して、これらの語彙に対応する徳之島と奄美大島での語形を見てみると、次のようになっているからである。

(17) 奄美語の徳之島と奄美大島における (16) の同源語の語形

徳之島浅間: jasiri: (やすり: ただし新語) tsiri: (釣瓶: ただし「釣り針」の意味が主)
matiri: (祭り: ただし新語) jiri: (女から見た男兄弟) hudui (稲光)
奄美大島大和浜²⁰⁾: -- (やすり) ts'iri: (釣り) -matsiri (祭り)
jeheri (女から見た男の兄弟) cidziri (稲光)

奄美語のうち徳之島と奄美大島では、祖体系の *su や *tu の音節の中心となる母音が、それぞれ si、s'i のように中舌の /i/ で出現する。これは徳之島方言の simi: (墨)、sina: (砂)、sigata (姿)、s'imī: (瓜)、s'iki: (月)、s'iju (露)、あるいは奄美大島大和浜方言の simi (墨)、sina (砂)、s'imī (瓜)、s'iki (月)、s'iju (露) などの例²¹⁾から分かる。この事実から、(16) の「やすり」は祖体系において *suri を、「釣瓶・釣り糸」と「祭り」は *turi を、その語末の音連鎖と

して持っていたことが推定される。

一方、奄美大島大和浜方言の *jeheri* (女から見た男の兄弟) の祖形の語末には、**eri* という音連鎖が想定される。— この方言では本来の **e* が狭母音化せずに *e* のまま出現することもある。— また、同じ大和浜方言の *çidziri* (稲光) には、**pideri* が再建されなければならないだろう。「稲光」は、その祖形から **pideri* > **pid^heri* > **pidz^heri* のような変化過程²²⁾を経て、最終的に現代の大和浜方言の語形 *çidziri* へと変化したと思われる。一方、(16) にある首里方言の「稲光」の語形 ϕ *udi*、那覇方言の ϕ *uri*、今帰仁方言の *p^hudi*、伊是名島方言の *hudi* の祖形には、**poderi* が再建できる。この祖形から、**poderi* > **podei* > **podii* のような変化の過程を経て、現在のそれぞれの語形になったと想定される²³⁾。つまり奄美語の大和浜方言についても、沖縄語の首里・那覇・今帰仁・伊是名島の諸方言についても、その祖体系における「稲光」の祖形の語末には、**deri* という音連鎖が存在していたことが想定される。

以上をまとめると、(16) に挙げられた語彙の祖形には、次のようなものが再建できる。

(18) 北琉球祖語の祖形案

**jasuri* (やすり) **turi* (釣瓶・釣り針) **maturi* (祭り)
**wekeri* / **jekeri* (女から見た男の兄弟) **pideri* / **poderi* (稲光)

(18) の祖形案から分かるように、これらの語彙は **uri* あるいは **eri* の音連鎖をその語末に持ち、それぞれ **uri* > **ui* > *ii*、**eri* > **ei* > *ii* のような変化過程を経て、(16) に挙げられるような、現代の語形へと変化を遂げた、と考えられる。すなわち、(16) に挙げられた首里・那覇・今帰仁・伊是名島方言に見られる現代の語末の /*ii*/ という音連鎖は、**iri* にさかのぼるものではなく、実は **uri* あるいは **eri* にさかのぼる、ということになる²⁴⁾。

8. 歯茎流音 **r* の脱落変化が生じなかった語例と祖形再建上の限界

それでは、過去に **iri* だったものは、沖縄語の久米島・首里・那覇・今帰仁・伊是名島方言の祖体系において (4) の **r* の脱落変化が起こった時点で、どのような形に変貌を遂げたのだろうか。そこで、国立国語研究所 (編) (1998) の首里方言のデータの中から、現在 /*iri*/ の音連鎖で終わる語例を探してみると、次のような例が見つかった。

(19) 沖縄語の首里方言における /*iri*/ の音連鎖で終わる語例

η *iri* (錐) η *iri* (西) **t***iri* (霧) *nukudziri* (鋸) *nidziri* (右)

さて、ここで国立国語研究所 (編) (1998) によって首里方言で「左」という語を調べてみると、 ϕ *idzai* のように、**r* の脱落変化 (4) の影響を受けて、その語末音節の **r* は脱落している ((10a) 参照)。これに対し (19) にある「右」という語は、*nidziri* (右) のように出現して、同じ (4) の条件変化の影響を受けて \times *nidzii* のようにはなっていないことが注目に値する。

ここで、長田・須山・藤井 (編) (1980) を参照して、奄美語の奄美大島大和浜方言における (19)

の同源語を見てみると、「ʔiri (錐)、-- (西)²⁵⁾、k'iri (霧)、nohogiri (鋸)、nigiri (右)」となっている。すなわち (19) の語は、北琉球祖語の段階で、(*re でなく) *ri を、その語末に持っていた可能性がある。それにもかかわらず、(19) に挙げられた語は、首里方言では (4) の条件変化の影響を免れているのである。

実は (19) に挙げられた語は、他の沖縄語の諸方言でも、首里方言と同様に (4) の変化の影響を免れている。これは、次の例から確認できる。次の久米島方言は木部 (編) (2017)、那覇方言は内間・野原 (編著) (2006)、今帰仁方言は仲宗根 (1983)、伊是名島方言は伊是名島方言辞典編集委員会 (編) (2004) のものである。

(20) 沖縄語の諸方言における (19) の同源語

久米島： ʔiri (錐) ʔiri (西) kiri (霧) nukuziri (鋸) niziri (右)
 那覇： ʔiri (錐) ʔiri (西) -- (霧) nukudʒiri (鋸) nidʒiri (右)
 今帰仁： ʔiri: (錐) ʔiri: (西) tʃiri: (霧) no:ʒiri: (鋸) ʒiri:, ʒuri: (右)
 伊是名島： ʔiri: (錐) ʔiri: (西) tʃiri (霧) nuhudʒiri (鋸) nidʒiri (右)

首里方言では、変化の過程で語末の /ii/ という母音連鎖が生じるのを回避するような傾向があったことがすでに指摘されている (津波古 1992 : 832) が、同様な傾向は、他の沖縄語の諸体系にも共通して見られることが、(20) の例から確認できる。このことは、これら沖縄語の諸方言の祖体系で、*r の脱落変化 (4) が /i/ の後ろでは阻止された、ということを示唆している。

本稿では、この沖縄語の祖体系には過去において、*r の脱落変化を阻止するために働いた一種の「制約」のようなものが存在していたことを提案したい。すなわち次のような制約の存在を、首里、久米島、那覇、今帰仁・伊是名島などの祖体系に想定するのである²⁶⁾。

(21) 制約：規則的变化の結果、/ii/ の母音連鎖が生じるのを避けよ。

この制約は現在、本節で扱った久米島、首里、那覇、今帰仁、伊是名島を代表とする多くの沖縄本島 (およびその周辺の島々) の諸方言の音韻上の特徴に、その痕跡を残している。

本稿では、この地域では (21) の制約が過去に存在していたために、本来その祖形が *iri という音連鎖で終わっていた語には、*r の脱落変化 (4) が阻止されることになった、と提案する。つまり、この制約が存在したために、「左」のほうは (4) の変化の影響を受けて $\phi idʒai$ となっても、「右」のほうはその変化の影響を受けずに終わり、そのために、nidʒiri のように、現代に至るまでその語中の /r/ が保たれる結果となった、と解釈するのである。

ここで、国立国語研究所 (編) (1998) を参照すると、首里方言には、/iri/ という音連鎖で終わる語として、次のようなものが見つかった。

(22) 現代首里方言において /iri/ で終わる語例

ʔiri (錐) ʔiri (西) tʃiri (霧) nukudʒiri (鋸) ʔutʃiri (燠) ci:ri (肥溜め) nidʒiri (右)
 ʔacidʒiri (足の裏に生じるあかぎれに似た裂け目・芝・芝草) wataʔiri (綿入れ)

φuda?iri (投票) midzi?iri (水入れ) muku?iri (婿入り式) tei?iri (気に入り) dzin?iri
 (錢入れ) t?iri (きれ・布) jakidzi (焼けた木切れ) munuciri (物知り) sidzi (硯)
 t?iri (連れ・同伴者) mitidzi (道連れ) dzidzi (茶壺) gudzi (かれ枝) handzi (た
 らい) φidiri (日照り・旱魃) φidzi (燃えさし) ?idzi (気力) judzi (遺伝)
 jundzi (足の裏にできるあかぎれに似た裂け目) madzi (間切 (昔の行政区画))
 misidzi (神の託宣) mutit?iri (独占) nidzi (ねじ) niri (食物の中に混じっている砂
 など) suciri (悪口) t?iri (ちり) tidzi (契り) kadzi (限り) tei:gadzi (乳不足)
 (国立国語研究所 (編) 1998から)

もし (21) のような制約がこの沖縄語の祖体系に働いていたとすれば、(22) に挙げられた現代首里方言の語彙には、祖体系において *iri の音連続で終わっていた語と、*ire の音連続で終わっていた語とが混在している、ということになる。(4) の条件変化の後に起こった狭母音化 *e>i の影響で、最終的に語末の *ri と *re は合流してしまい、現在では両者とも /iri/ のように実現していることが想定されるからである。

だとすれば、(22) に挙げられた語彙の中から、その祖形の語末の音連鎖が *iri だったものを *ire だったものから区別して取り出すことは、もはや (少なくとも現代の首里方言のデータからは) 不可能になっていることになる。したがって、(22) の語例には、その祖形案をあえて提示しないでおくことにする。

以上、現代沖縄語の諸体系 (沖縄本島の首里・那覇・今帰仁などの体系、および久米島、伊是名島などのその周辺の島々の体系) から得られたデータには、この節で述べたような歴史言語学上の「限界」があることが明らかになった。

9. 与論島・沖永良部島の記述データの拡充がもたらすもの

このように、かつて (21) の制約が働き、かつ現代において本来の *iri と *ire の音連続が完全に合流してしまっている沖縄語の諸方言の体系からは、各語の祖形の語末がどちらだったかを、その現在の語形をもとにして判断することはできない。

しかしながら、同じ北琉球の与論島と沖永良部島のデータから、この限界を乗り越えることができる可能性が見えてきた。たとえば、木部 (編) (2016) の与論島と沖永良部島の基礎語彙の調査報告を見ると、「錐、西、鋸、霧」に対して、?i: (錐)、?i: (西)、no:gi: (鋸)、ki: (霧) (与論島古里・那間・叶方言の語例)、あるいは ?i: (錐)、?i: (西)、no:gi: (鋸) (沖永良部島田皆方言の語例) のような語形が記録されている。このことは、与論島方言と沖永良部島方言の祖体系には、(21) の制約が働いていなかったことを示唆している。

つまり、この2つの島々 (与論島と沖永良部島) の体系には、本来 *iri という音連鎖で終わっていた語にも *r の脱落変化 (4) が及び、その結果 /ii/ という母音連鎖が出現した、ということになる。このことは、今後この2つの島の諸体系を詳しく調査して検討すれば、前節で指摘したような、祖語再建にかかわる沖縄語の諸方言のデータの限界も、乗り越えられる可能性が見えてきたことを意味する。

この可能性をさらに掘り下げるために、菊・高橋 (2005)、上野 (2005a, b, 2006a, b, c) を参照しながら、与論島方言と、沖永良部島和泊町の皆川方言において、(4) の変化の影響で /ii/ という音連鎖で終わることになったと思われる語を探した結果、次のような語例を得た²⁷⁾。また(19) に挙げた語に加えて、「燠」「下水」「ナマコ」という語²⁸⁾も、(4) の変化により *iri>ii と変化して、その語末に /ii/ が生じた可能性があることがあらたに認められた。ただし沖永良部島では、ʔuti (燠)、ci:ci (ナマコ) のようにその語末母音が短母音化していたが— ため、その語形を以下に追記する。

(23) 現代の与論島方言と沖永良部島方言において /ii/ で終わっている語例

与論島： ʔi: (錐) ʔi: (西) ki: (霧) no:gi: (鋸) -- (右)
 ʔukki: (燠：炎をあげずに燃えている薪) ci: (下水) cikki: (ナマコ)
 沖永良部島：ʔi: (錐) ʔi: (西) -- (霧) no:ɕi: (鋸) -- (右)
 ʔuti (燠：赤くおこった炭火) (古) -- (下水) ci:ci, ci:ci (ナマコ)

この事実をもとに、現代沖縄語の首里方言の「ʔiri (錐)、ʔiri (西)、ɕiri (霧)、nukudɕiri (鋸)、ʔuti:iri (燠)、ci:ri (肥溜め)」などの語 (つまり (22) に挙げられた語彙のうちの最初の6語) も、北琉球の祖体系においては、その語末に (*ire ではなく) *iri という音連鎖を持っていたことが推定できる。(ちなみに国立国語研究所 (編) (1998) には、「ナマコ」という見出し項目はなかった。) つまり、比較言語学的な見地からの分析を行えば、これら6語の語末には、(*ire ではなく) *iri が再建できることになる。

以上述べてきたことに基づいて、本稿は、(23) に挙げた語の北琉球祖語における祖形として、*iri という音連鎖を語末に持つ、次のようなものを提案したい。

(24) 北琉球祖語の祖形案

*iri (錐) *iri (西) *kiri (霧) *nokogiri / *nukogiri (鋸)
 *okiri / *ukiri (燠) *siri (下水・肥溜め) *sikiri (ナマコ)

これに対し、(22) に挙げた首里方言のものと同源語で、与論島において /iri/ という音連鎖で終わっているものを菊・高橋 (2005) から探してみたが、次のものだけしか見出せなかった。

(25) 与論島において /iri/ で終わっている語例

ʔaci:ɕiri (皮膚のただれ) wataʔiri (綿入れ) kiri (切れはし)
 munuɕiri (すべてのことによく通じていること・易者) ci:ci:ri (硯)

これらは、その祖形の語末が *ire という音連鎖で終わっていた可能性がある。しかしこの中にも、(4) の変化の後に、借用語として取り入れられた語が含まれている可能性もある。そのため本稿では、慎重を期すために、これらの祖形の提案もあえて行わないこととした。

しかしながら、以上この節で述べてきたことから、今後、与論島と沖永良部島で詳細な記述調

査を行えば、前節で述べたような沖縄語の諸体系の持つ祖語再建上の限界をも、克服することができることが分かってきた。すなわち、首里・那覇・今帰仁・久米島・伊是名島などの諸方言で /iri/ という音連鎖で終わる語彙について、その祖形の語末が *iri であったか *ire であったかを判断するための手がかりは、(これら沖縄語の諸体系の内部を検討しても得られないが) 同じ北琉球の与論島と沖永良部島を詳細に調査・検討すれば得られる、ということになる。このようにして、一地域の内的再建において生じる限界を、比較再建の手立てを採ることによって乗り越えることができることが明らかになった。

10. おわりに

以上、辞書や先行研究の記述によって得られた北琉球の諸方言のデータを用いて、同系統の複数の言語体系における同源語を比較し、その音対応をもとにした歴史言語学的考察を行ってきた。本稿では、北琉球祖語の段階から現代の諸体系に至るまでに起こった変化の中から、特に「歯茎流音 *r の脱落変化」に焦点を当てて、いくつかの語の祖形再建を試みるとともに、借用語を判別する試みも行った。一般に祖語の再建にあたっては、内的再建と比較再建とを組み合わせ考察することが求められている。そのためには、一言語の体系全体をくまなく見わたす視点とともに、同系統の他の言語体系をも幅広く視野に入れて検討することが求められる。本稿ではこれを、北琉球の諸体系の同源語のデータをもとにして実践しようと努めた。

昨今、琉球諸語・諸方言の辞書の刊行が活発に成されており、そのため、記述データの総量が増してきている。それにより、過去には不可能だった比較言語学的な考察も、徐々に可能となる条件が整いつつあることは、大変喜ばしいことに思う。とりわけ、土地に生まれ育って、そこに記述されている語彙を日常語として使用してきた人々の編集した語彙集や辞書は、その研究上の価値がとりわけ高いものである。今後もより多くの地点で、同様な語彙集や辞書が編纂されていくことを、願ってやまない。

しかしながら、今回、北琉球諸方言の比較をころみで痛感したのは、琉球語の本格的な歴史言語学的考察を行うためには、(たとえすぐれた辞書が、すでに存在する地点においてさえ)さらなるデータ補充のための調査が不可欠だ、という点である。たとえば今回、比較言語学的考察のために、同系統の諸方言のデータから同源語を探す、という作業を、数種類の辞書や記述報告を使って行ったが、その過程において、祖形再建にとって重要な鍵となる肝心の語の語形が、それを知りたいと思う地点の辞書や記述報告の見出し語の中に存在しない、という事態に何度も遭遇した。これは主として、それぞれの辞書・記述報告によって、どの語彙を記述に残すか、という方針が、そもそも異なることから生じるものである。

ある方言の体系にもともと存在しない語については、当該の語が辞書や記述報告に載せられていなかったとしても、あきらめがつく。しかし、実はその体系に存在しているのだが、「(著者・編者にとっての) 日常語ではない」、「(古くは使用されていた語だったかもしれないが) 現在では使用頻度があまり高くない」などの様々な理由から、当該の辞書や語彙集の著者・編者がたまたま拾い上げて記述に残さなかった、というケースも多いのではないかと推察される。

しかし我々は今後、たとえ使用頻度が少ない語であったとしても、他の体系との比較の上で重

要となる語については、できる限りそれを記述に残していく、という方針で、さらなる調査に臨む必要があるだろう。これは、ある体系の記述データの総量をただ増加させていけばよい、というようなことではない。先人が記述に残さなかった（あるいは調べ落としたり）語を、丹念に拾い上げて記述し、「足並みをそろえた」データベースを作成することが求められているのである。

このように、諸方言の比較・検討のために、琉球全域において足並みをそろえたデータベースを作成するためには、研究者の努力が求められている。すなわち我々は、ある特定の地点ですぐれた辞書がすでに公刊されているからといって、その事実で満足せず、さらにその地点の調査・記述を継続していかなければならないのである。本稿の執筆を通じて、以上のようなことを、あらためて実感した。

謝辞：本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」、およびJSPS科研費基盤研究(C)（課題番号18K00588）、JSPS科研費基盤研究(A)（課題番号19H00530）の研究成果の一部である。

注

- 1) たとえばローレンス (2020) の祖形案は、今のところ、一部の琉球語研究者間に共有されているだけで、誰もが簡単に入手できる、という性質のものではない。また五十嵐 (2019) の提示している祖形案は、「あくまでも調査の参考のために」という但し書きのもとに公開されているため、それらに批判的な検討を加えることは躊躇される。このような事情によって本稿では、それらの祖形と、本稿で提示する北琉球祖語の祖形との異同を取り上げて論じることは、あえて行わない方針とした。
- 2) これに対し南琉球では、狭母音化 *e>i によって、*e は現代の /i/ へと変化を遂げ、それに平行して本来の狭母音 *i のほうは、*i>ï のような変化によって中舌母音の /ï/ へと変化を遂げている。
- 3) 長田・須山・藤井 (編) (1980) には、大和浜方言では「椀」はwaN、「埃」は huhuN とあり、いずれも (3) に示された久米島方言の対応語とは同源ではないと考えられたため、ここでは -- で示してある。(ただし、huhuN は、久米島の ϕ ukui と同じ祖形 *pokori から、*pokori>pok^hori>puhori のような中間段階を経て生じた可能性がある。これについては今後の考察の課題としたい。)
- 4) 与論島の古里・那間・叶方言の ?a:gai (光)、沖永良部島の田皆方言の hwa:tu (鳥)、tamaçi (魂) は、それぞれ (8) に挙げられた対応語と同源とは認められないため、これらは -- で示してある。
- 5) この条件を満たす語は多数あったので、紙幅の都合上、参照した辞書・記述研究のうちの2つ以上に同源語が掲載され、その祖形の妥当性を確認することが容易な例を選んで載せることにした。
- 6) これらの祖形推定は、次の3点を考慮しながら行った。(その1) *pikari> ϕ itçai (光)、*pidari> ϕ idçai (左)、*tidori> \mathbf{t} idçori> \mathbf{t} idçui (千鳥)、*pitori> \mathbf{p} itçori> \mathbf{t} ui (一人) には、語頭音節の母音 i の影響で続く子音に進行同化 (*ka>k^ha> \mathbf{t} ca, *da>d^ha> \mathbf{d} ca, *to>t^ho> \mathbf{t} co など) が起き、阻音音 k, d, t が口蓋化を起こしているが、その進行同化が生じる前の形を祖形に建てた。(その2) sugai (装い)、kusui (葉)、 \mathbf{t} umai (船着き場)、 \mathbf{t} unai (隣)、ja:dui (都落ちした土族の部落)、 \mathbf{t} ui (鳥)、 \mathbf{t} idçui (千鳥)、 \mathbf{t} ui (一人)、wudui (踊り) の9つの語の下線部の音節の祖形は、*su、*tu、*du ではなく、*so、*to、*do と考えられる。なぜなら、仮にこれらが *su、*tu、*du を持っていたとすれば、これらは現代の首里方言ではそれぞれ /si/、/tsi/、/dzi/ として出現するはずだからである (参考：首里方言の \mathbf{s} i:si (煤)、 \mathbf{s} ina (砂)、 \mathbf{s} igata (姿)、 \mathbf{s} imi (墨)、?u:si (臼)、 \mathbf{t} simi (爪)、 \mathbf{t} siçi (月)、 \mathbf{t} siju (露)、 \mathbf{t} sidçiN (鼓)、 \mathbf{t} i:tsi (一つ)、 \mathbf{m} idçi (水))。しかし、上述の9つの語の下線部には、/su/、/tu/、/du/、/çu/、/çui/ などが出現している。このことから考えて、これらの祖形には (*su、*tu、*du ではなく) *so、*to、*do を建てた。(その3) *komori (池)、*kusori ~ *kosori (葉)、*kori (裏部屋) の語頭音節が *ko か *ku かは、今帰仁方言の humui (池)、k^husui (葉)、k^hui (庫裏・裏部屋)、徳之島方言の k^humui (沼や池)、k^husui (葉)、- (庫裏)、奄美大島大和浜方言の k^homori (穴)、k^husuri (葉)、- (庫裏) の当該の子音部分の特徴 (喉頭化音 k^h か非喉頭化音 k^h かなど) を考慮に入れて推定した。なお、*tomari (船着き場)、*tonari (隣)、*tori (鳥) の語頭音節についても、同様な検討

- を行った。
- 7) (11b) の *tidori (千鳥) *pitori (一人) の語中の *do や *to が、現代の首里方言で /du/ あるいは /tu/ ではなく /ɗu/ あるいは /tɗu/ で出現しているのは、注6の(その1)で述べた進行同化の影響であろう。この変化により、語中の阻害音 *d, *t が *do>d^ho>ɗo、あるいは *to>t^ho>ɗo のように口蓋化を起こした結果、**tɗidui** (千鳥) **tɗui** (一人) のような現代の姿に変化したと考えられる。
 - 8) 服部 (1956, 1959: 138) には、次のような指摘がある。「あがり (東)」は『おもしろさうし』に「あがるい」とあるのから変化したものであり、これは日本語の「上り」に対応するものではない。なぜなら、もし「上り」ならばそれは音韻法則的に「あがい」とあるはずだが、そうってはいない。この服部 (1956, 1959) の指摘は、「東」の琉球祖語の祖形として *agarui を建て得る可能性を示唆している。ちなみに中本 (1981: 200-201) を参照すると、現代の琉球諸方言のなかには、「東」に ʔagarui という語形が出現する地点が、1か所だけ (奄美諸島の与路島) 存在する。
 - 9) 「東」という語は、南琉球の石垣島では ʔa:ri (宮城 2003)、伊良部島方言では ʔaʔa:zi (富浜 2013) なので、南琉球祖語のこの語の語末には *ri が再建でき (注2を参照)、*agari のような祖形が建てられる。北琉球と南琉球のこのような違いは、なぜ生じたのだろうか。これは、今後の課題としたい。
 - 10) またこの語は、伊波普猷の「琉球語彙」(伊波1934, 1974: 156) にも取り上げられ、「芽、草木の幹・枝・葉などのまだのびないもの。萌出の義か。」とある。しかし伊波 (1934) には、この語の由来 (琉球祖語から存在していた語か、それとも後からの借用語か。借用語なら、どのような経緯で琉球語に取り入れられたものか、など) について、それ以上の詳しい考察は成されていない。
 - 11) ちなみに首里方言の miduri (芽) という語は、那覇方言で miruri (内間・野原 (編著) 2006)、今帰仁方言で miduri: (仲宗根 1983)、伊是名島方言で miduri: (伊是名島方言辞典編集委員会 (編) 2004)、久米島方言で mizuri~miduri (木部 (編) 2017)、のような語形で現れており、いずれも (4) の条件変化、および注6の(その1)で述べた進行同化の影響を受けていない。
 - 12) そこには *r の脱落変化 (4) とともに、注6の(その1)で述べた進行同化 (*mido>mid^ho>midɗo)、さらには *mi の母音脱落と鼻子音 *m の音節主音化 (*mi>N) (*mita>Nɗa (土)、*mino>Nnu (蓑) がその具体例である。) が起きたことが想定されるからである。
 - 13) この首里方言の naguri という語だが、仲宗根 (1983) によれば、今帰仁方言には「波」の意味で nagui (333頁)、「名残り」の意味で naguri: (334頁) と、2つの異なる意味の語が存在している。また伊是名島方言辞典編集委員会 (編) (2004) にも、「波音・海鳴り、波」の意味で nagui、「名残り・残り物」の意味で naguri (いずれも458頁) とある。さらに菊・高橋 (2005) によれば、与論島方言でも「うねり・高いうねる波」の意味で nagui、「憐み・情け」の意味で naguri (いずれも379頁) という、意味の異なる2つの語がある。それぞれ、前者は北琉球祖語の段階から存在していた (*nagori を祖形にする) 在来語、後者は *r の脱落変化 (4) の後に、あらたに nagori の形で取り入れられて定着した借用語、と本稿では解釈しておく。
 - 14) 特に「鉛」と「緑」については、借用語の可能性がとりわけ高いように思われる。なぜなら、そのアクセント型も本土のそれとの不一致が見られるからである。本土の類別語彙では、「鉛」と「緑」は両者とも3音節語第7類に所属する。ということは、もしこれらが琉球祖語の段階からすでに存在していた語であるならば、現代の琉球語ではC系列で出現することが期待される。しかし、たとえば仲宗根 (1983) を参照すると、今帰仁方言ではどちらの語もB系列で出ていることが分かる。
 - 15) この語も借用語の可能性が高い。なぜなら、もしこの語が北琉球祖語の段階から *midare の形で存在していたのであれば、注6の(その1)で述べたような進行同化 (*mida>mid^ha>midɗa) の影響を受けてその語中の阻害音の d が口蓋化を起こし、さらに注12で述べた *mi>N の変化が生じて、たとえば現代首里方言では (midari ではなく) Nɗari のような語形で出現しているはずだからである。ちなみに国立国語研究所 (編) (1998: 438) には Nɗari (乱れ、もつれ) という語が載せられているが、こちらのほうが、*midare から生じた在来語だろう。
 - 16) *kure (烏賊の墨) の初頭音節は、今帰仁方言で k'urii のように喉頭化した k' を持っているので、*ko ではなく *ku を、その祖形の語頭音節に建てた。なお「烏賊の墨」は、与論島方言で ʔitea gurui という語形で出現している。その語形の後半部から、この語には (*kure よりさらに古い祖形として) *kurui を再建できる可能性があることが分かる。注8で述べた *agarui (東) が *agarui>*agare となったのと同時期に、*kurui>*kure のような変化が生じたのではないだろうか。
 - 17) 「夏のにわか雨 (通り雨)」は、首里方言で natsiguri (国立国語研究所 (編) 1998)、与論島方言で nateiguri (菊・高橋 2005)、沖永良部島方言で nateiguri (上野 2006a: 38) となっているので、

- *natugure のように、その後半部 -guri の部分には *re で終わる形を再建した。ちなみに与論島方言では、「しぐれ・通り雨」を意味する語として kuri (菊・高橋 2005: 194) があるので、「通り雨・にわか雨・夕立」の単独形の祖形として *kure が建てられる可能性がある。
- 18) *tore (風) の下線部にも、*tu ではなく、*to を再建した。仮にこの音節が *tu だったとすれば、現代首里方言では ×tsiri のような語形で出現していることが期待されるが、(12b) から分かるように現実には turi のような語形で出現しているからである。(これに関連しては、注 6 の (その 2) を参照)
 - 19) *osore / *usore (敬うこと) の下線部には、*su ではなく、*so が建てられる。(12b) から分かるように現代首里方言のこの語形は ?usuri であり、?usiri ではないからである。(注 6 の (その 2) を参照)
 - 20) 「釣瓶」は長田・須山・藤井 (編) (1980) の見出し語にはなかったのだが、「釣り針」「釣り道具」の意味でそれぞれ ts'iri-bari, ts'iri-do:gu という語形があったので、その語根をここに載せた。「祭り」も単独形の見出し語にはなかったが、「地鎮祭」「イノシシ狩の祭」の意味で ɕi-mats'iri、ɕu:mats'iri という語形があったので、その語根をここに載せた。また「稲光」は、k^hannari nu ɕidiri (稲光) と出ていたものの ɕidiri の部分をここに示した。
 - 21) 徳之島は上野 (2017a, b) の浅間方言、奄美大島は長田・須山・藤井 (編) (1980) の大和浜方言の例である。
 - 22) *pideri > *pid'eri のように、狭母音 i の影響が、続く音節の初頭の子音に及び、その子音を (*de > d'e のように) 口蓋化する、という「進行同化」については、注 6 の (その 1) で触れた。
 - 23) これに対して徳之島方言の hudui の祖形は、*podori の可能性がある。また木部 (編) (2017) を見ると、久米島方言での「稲光」の語形にも ɕurui とあるが、この語の祖形にも *podori が建てられる。なぜ首里・那覇・今帰仁方言の語形にも同じ祖形 (*podori) を建てないかという、もしそれを祖形にするとすれば、現代の首里方言で *ɕudui、那覇方言で *ɕurui、今帰仁方言で *p^hudui、伊是名島方言で *hudui のような形で出現するはずであるのに、実際には ɕudi: (首里)、ɕuri: (那覇)、p^hudi: (今帰仁)、hudi: (伊是名島) のような語形で現れているからである。
 - 24) このことも、*r の脱落変化 (4) が相当に古い変化であることを示唆している。この (4) の条件変化は、本来の *u が、コロナルな子音の後ろで *su > si、*tu > ti のように前舌化する、という母音変化 — おそらくはその中間段階で母音の中舌化 *u > *i を経たであろうが、ここではそれには触れない。— や、狭母音化 *e > *i > i によって本来の *e が *i と合流してしまう変化よりも、歴史的に前に生じた、と考えるなければならない。なぜならば、これらがもし、*jasuri > *jasiri (やすり)、*wekeri > *wekiri (女から見た男兄弟) のように *iri という音連鎖で終わる語に変化した後に (4) が生じたとすると、(21) で後述する制約の影響によって、それらは *jasiri、*wekiri のままとどまり、現代の jaci: や wiki: のような語形には変化しないはずだからである。
 - 25) 奄美大島の大和浜方言の「西」は、nici という語形で出ており、(19) に示した首里方言の ?iri (西) とはあきらかに同源語ではないため、ここでは — で示した。
 - 26) この /ii/ の母音連鎖が生じるのを避けるために働いた (21) のような制約を共有していた首里、久米島、那覇、今帰仁、伊是名島方言などの諸体系は、系統的に近いと言うことができるだろう。これら沖縄語の諸方言の祖体系は、この制約が生じる前に、他の北琉球の諸方言から独立・分岐したことが想定される。
 - 27) なお「右」という語は与論島方言で migi:、沖永良部島方言で midzi、あるいは migi という語形で出て、沖縄本島の nidiri (右) (首里方言の語形) とは同源語でない、と判断されたので、ここでは — で示してある。(上野 (2005a, b, 2006a, b, c) には「右」という項目がなかったのだが、木部 (編) (2016) には、沖永良部島の国頭方言で midzi、出花方言で migi という語形があったため、本稿ではそれを参照した。)
 - 28) ちなみに、奄美大島の大和浜方言のこれらの同源語の語形は、?uk'iri (燠)、— (下水)、t'ikiri (ナマコ) である。

参考文献

- 五十嵐陽介 (2019) https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/download/238738/86b4e49faf0f27bff29c1cf84fc6bc37/7157?col_no=2&frame_id=729332
 伊是名島方言辞典編集委員会 (編) (2004) 『伊是名島方言辞典』伊是名村教育委員会

- 伊波普猷 (1934) 「琉球語彙」『南島方言史攷』 楽浪書院 伊波普猷 (1974: 123-170) に所収
- 伊波普猷 (1974) 「琉球語彙」『伊波普猷全集 第4巻』 平凡社 123-170頁
- 内間直仁・野原三義 (編著) (2006) 『沖繩語辞典—那覇方言を中心に—』 研究社
- 上野善道 (2005a) 「沖永良部島方言語彙のアクセント資料 (1)」『琉球の方言』 29: 1-40.
- 上野善道 (2005b) 「沖永良部島方言語彙のアクセント資料 (2)」『アジア・アフリカ文法研究』 33: 155-204.
- 上野善道 (2006a) 「沖永良部島方言語彙のアクセント資料 (3)」『琉球の方言』 30: 1-49.
- 上野善道 (2006b) 「沖永良部島方言語彙のアクセント資料 (4)」『アジア・アフリカの言語と言語学』 1: 129-157.
- 上野善道 (2006c) 「沖永良部島方言語彙のアクセント資料 (5)」『東京大学言語学論集』 25: 249-297.
- 上野善道 (2014) 「喜界島方言のアクセント資料 (3)」『国立国語研究所論集』 7: 289-310.
- 上野善道 (2017a) 「徳之島浅間方言のアクセント資料 (3)」『国立国語研究所論集』 12: 139-161.
- 上野善道 (2017b) 「徳之島浅間方言のアクセント資料 (4)」『国立国語研究所論集』 13: 209-242.
- 長田須磨・須山名保子 (編) (1977) 『奄美方言分類辞典 上』 笠間書院
- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子 (編) (1980) 『奄美方言分類辞典 下』 笠間書院
- 長田俊樹 (編) (2020) 『日本語「起源」論の歴史と展望—日本語の起源はどのように論じられてきたか—』 三省堂
- 狩俣繁久 (2012) 「琉球列島における言語接触研究のためのおぼえがき」『琉球の方言』 36: 9-28.
- Karimata, Shigehisa (2015) Ryukyuan languages: A grammar overview. In Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.), 113-140.
- 狩俣繁久 (2020) 「第9章 琉球語の起源はどのように語られたか—琉球語と九州方言の関係を問う—」長田俊樹 (編) 『日本語「起源」論の歴史と展望—日本語の起源はどのように論じられてきたか—』三省堂 227-249頁
- 菊千代・高橋俊三 (2005) 『与論方言辞典』 武蔵野書院
- 木部暢子 (編) (2016) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究—与論方言・沖永良部方言調査報告書』 国立国語研究所
- 木部暢子 (編) (2017) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究—久米島方言調査報告書』 国立国語研究所
- 国立国語研究所 (編) (1998) 『国立国語研究所資料集5 沖繩語辞典』 大蔵省印刷局
- 田窪行則 (編) (2013) 『琉球列島の言語と文化—その記録と継承』 くろしお出版
- 田窪行則・ジョン・ホイットマン・平子達也 (編) (2016) 『琉球諸語と古代日本語』 くろしお出版
- 津波古敏子 (1992) 「琉球列島の言語 (沖繩中南部方言)」『言語学大辞典 第4巻 世界言語編 (下・2)』三省堂 829-848頁
- 富浜定吉 (2013) 『宮古 伊良部方言辞典』 沖繩タイムス社
- 仲宗根政善 (1983) 『沖繩 今帰仁方言辞典』 角川書店
- 中本正智 (1981) 『図説琉球語辞典』 金鶏社
- 名護市史編さん委員会 (編) (2006) 『名護市史本編・10 言語』 名護市役所
- 服部四郎 (1956) 「琉球語および琉歌について」『心の花』 60-8. 服部 (1959: 134-152) に採録
- 服部四郎 (1959) 『日本語の系統』 岩波書店
- 服部四郎 (1978a) 「日本祖語について・6」『月刊言語』 7-8: 88-96. 服部 (2018: 142-152) に採録
- 服部四郎 (1978b) 「日本祖語について・8」『月刊言語』 7-10: 94-103. 服部 (2018: 171-182) に採録
- 服部四郎 (1979) 「音韻法則の例外—琉球文化史への一寄与」『日本学士院紀要』 36-2: 53-79. 服部 (2018: 439-472) に採録
- 服部四郎 (2018) 『日本祖語の再建』 岩波書店
- Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.) (2015) *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- ペラルル、トマ (2013) 「日本列島の言語の多様性—琉球諸語を中心に—」田窪行則 (編) 『琉球列島の言語と文化—その記録と継承』 くろしお出版 81-92頁
- Pellard, Thomas (2015) The linguistic archeology of the Ryukyu Islands. In Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.), 13-37.
- ペラルル、トマ (2016) 「日琉祖語の分岐年代」田窪行則・ジョン、ホイットマン・平子達也 (編) 『琉

球諸語と古代日本語』くろしお出版 99-124頁

松森晶子（1992）「北琉球の音韻変化—その相対年代と比較言語学的意義—」『ことばのモザイク—奥田夏子名誉教授古稀記念論文集』目白言語学会 1-34頁

Matsumori, Akiko (1995) Ryukyuan: Past, present, and future. *Journal of Multilingual & Multicultural Development*, Vol.16, Nos 1 & 2, 19-44.

松森晶子（2000）「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から」『音声研究』第4巻1号: 61-71. 日本音声学会.

松森晶子（2012）「琉球調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』第16巻1号: 30-40. 日本音声学会

宮城信勇（2003）『石垣方言辞典』沖縄タイムス社

ローレンス、ウェイン（2019）「竹富島方言アクセント（2）」『琉球の方言』43：97-129.

ローレンス、ウェイン（2020）琉球語アクセントデータベース（未公刊）